2020年10月25日　久宝教会　降誕前 第9主日礼拝

メッセージ「人間とは何者なのでしょう」牛田匡牧師

聖書　詩編　8編1－10節

10月も下旬となり、朝晩は随分と寒くなってきました。秋が深まり、寒暖の差が出て来ましたが、皆さん体調は崩されていないでしょうか。昨晩は雲が出ていたために、月や星は見えませんでしたが、段々と夜が長く、深くなって来て、月や星がきれいに見える季節になって来ました。ところで、皆さんは最近、夜空をゆっくり眺められているでしょうか。思い返してみると、私自身はあまり夜空を眺めていませんでした。それは見上げる空が小さかったり、外灯や周りの家の光で、空が明るくて星があまり見えなかったりするからかもしれませんし、単に気持ちにゆとりがないからかもしれません。

私が今までに見た星空で、印象に残っているのは、学生時代に北アルプスを登山していた時に見た満天の星空と、北海道の牧場に行った際に、放牧地の真ん中に寝転がって眺めた星空でした。周りに遮(さえぎ)るものが何もなく、懐中電灯を消すと灯(あかり)が何もないので、夜空一面に星が輝き、まるで星が降って来るような感覚になりました。今、私たちの目に届いている星の光は、宇宙の遠く遠く遥か向こうから、何万年も前に発せられた光なのだそうですが、そのような難しいことは抜きにしても、満天の星空を前にすると、普段の日常生活の時間感覚とは全く別の、果てしなく拡がる宇宙の悠久の時の流れを感じるなど、不思議な気持ちになるのではないでしょうか。そして、それは恐らく何千年も昔から、人類が経験して来たことなのではないかと思います。

今回の聖書の言葉は、ヘブライ語聖書の中の「詩編」8編でした。この詩にも「ダビデの詩」という表題が1節に付けられていますが、実際の作者が誰かということは分かっておらず、作られたのも恐らくダビデよりもずっと後の時代、古代イスラエルの民がバビロン捕囚から解放された後、今

から約2500年前頃ではないかと考えられています。そしてこの詩は世界を創られた神の偉大さや、力強さをほめ讃える詩を歌っています。

4節では「月と星」を眺め、5節以降では、人間に始まって、羊や牛、野の獣、空の鳥、海の魚など、この世界中を生きる全ての生き物について述べられています。それら全ては、神様が造られた被造物であり、神様の働き、創造の業、その力強さを表わしているものだと、理解されて来ました。ですが、この詩の中で一番よく分からないのは、3節です。聖書協会共同訳では「幼子(おさなご)と乳飲み子の口によって砦(とりで)を築かれた」と訳されていますが、赤ちゃんがその口で砦を築くとは、一体どういう意味なのでしょうか。

この言葉は古代から様々に解釈され、3節を前の2節にかかっているものとして、読まれることもありました。例えば、以前の口語訳では「あなたの栄光は天の上にあり、嬰児(みどりご)と、乳飲み子との口によって、ほめたたえられています」と訳され、新共同訳では「あなたの御名(みな)は、いかに力強く／全地に満ちていることでしょう。天に輝くあなたの威光をたたえます。幼子(おさなご)、乳飲み子の口によって」と訳されています。新約聖書の「マタイによる福音書」21章16節には、イエス様の言葉として、この詩編の言葉が引用されていますが、そこに引用されているギリシア語七十人訳の言葉も、同様の解釈です。

しかし、元来のヘブライ語を見ると、聖書協会共同訳のように、「幼子(おさなご)と乳飲み子の口によって砦(とりで)を築かれた」と訳す方が、適切なようです。では、これは一体何のことを言っているのでしょうか……。それは幼子(おさなご)と乳飲み子のような無力な者、自分の力だけでは生きて行けないような弱い存在が、数々の敵対者や困難な状況の中にあっても、不思議と守られて来た。いつ滅びてもおかしくないはずなのに、生き延びて来られた、ということではないかと考えられます。言い換えるならば、そこには他でもない神様による守りや、導きという救い、古代イスラエル民族の救済体験が歌われているということです。

そして、そのように解釈する方が、聖書の価値観、イエス・キリストの価値観に通じているように感じます。人間の常識では、人数が多い方が、軍

事力に優っている方が強く、勝ち残りますが、神様はそのような人間の常識を越えて、むしろ非常識と思われることを通して、その力を表わされます。クリスマスに家畜小屋で生まれた難民の子どもが救い主となった、ということも同じです。自分では生きて行けないような幼子(おさなご)や乳飲み子であるにも拘(かかわ)らず、いやそのような無力な存在だからこそ、神様によって用いられていくのだ、ということなのでしょう。

そして詩人は続けます。5 節ですが「人とは何者なのか、あなたが心に留めるとは。人の子とは何者なのか、あなたが顧(かえり)みるとは」。ここで言われている「人（エノーシュ）」という言葉は、無力で儚(はかな)い存在を表わす場合に用いられている言葉です（詩 144：3、ヨブ 7：17）。しかし、それにも拘(かかわ)らず、そんな人間を神様は心に留め、顧(かえり)みられます。神様の方から人間に対して関心を持って近づいて来られます。そして 6 節によると、そのような人間は「神に僅かに劣る者とされた」とあります。この言葉は「創世記」の冒頭 1 章の「天地創造」の最後に人間を創られた時に、「神は人を自分のかたちに創造された」（27）という理解に基づいています。人間は無力で儚(はかな)い存在だけれども、同時に「神に似た者」として、ほとんど同じような存在として、「わずかに劣る者」として創られたというわけです。7 節以降も「創世記」の人間の創造の話に基づいていますが、そのような人間にこの地上を治める権利、管理する責任が与えられているということが歌われています。

「人間とは何者なのでしょう」……。この肉体は病気もすれば怪我もして、年老い、やがては朽ちていく土の器です。そのような限りある儚(はかな)い存在でありながらも、神様はそのような人間を心に留め、顧(かえり)み、大切にされます。この世界を任せ、管理させられます。そして無力な者をあえて選んで、用いられます。満天の星空の下、私たちが感じるのは、自分の小ささだけでしょうか。こんなにも無力で小さな自分、例えば幼子(おさなご)や乳飲み子のように一人では生きて行けないような自分には、何も出来ることがない、だから価値がない、ということでしょうか……。いえ、むしろ、この雄大な世界の中で、自分の力を越えた力、神様によって生かされている存在である

ということを感じるのではないでしょうか。自分の命は神様によって創られ与えられている。神様が心に留めて下っている。神様によって選ばれ、責任が任されている。だから、その事を覚えてもう一度やってみよう、そう思えるのではないかと思います。

しかし、その一方で現代社会に目を向けると、人間の小ささや限界から目を背け、自分たちの見たくないもの、都合の悪い事実には目を向けないということがまかり通っています。そのような社会は、言うまでもなく崩壊します。ヨーロッパでは、コロナの感染者が急増しているそうですし、すぐに開発されると言われていたワクチンも、やはり治験などに時間がかかっています。そのような世界情勢の中、とてもオリンピックどころではないにも拘(かかわ)らず、未だに日本政府は東京オリンピックの中止を発表しません。「社会のため、みんなのため」と言った時の「社会」や「みんな」に含まれているのは、一体どこの誰なのでしょうか。ごく一部の人の立場と利権を守るために、大多数の人々は忘れられ切り捨てられているように感じてなりません。

「人間とは何者なのでしょう」……。人間は時に悪魔にもなりますし、また天使にもなります。管理を任せられている世界を壊すこともできますし、守ることもできます。他者を傷つけることも生かすこともできます。

空に雲がかかっていたり、視界を遮(さえぎ)る物があったりして、夜空の星は普段はあまり眺められない環境かもしれませんが、それでも悠久の空や大自然に思いを馳せる時、私たちは世界の創り主である神様の存在を感じることができます。世界を創られた神様、私たち人間を創り、今日も命を与えて下さっている方は、今も私たちと共に、全ての被造物の中に、共におられます。その神様の価値観に従って歩む者へと、私たちは今日もまた、ここから変えられ、用いられて行きます。